

審判員派遣報告書

派遣事業名	第51回全国中学校 バスケットボール大会	派遣期日	令和3年8月18日～8月21日
報告者	高田 開	派遣先	ALSOK ぐんまアリーナ 高崎アリーナ

1. 大会概要

大会名称	第51回全国中学校 バスケットボール大会	大会期間	令和3年8月19日～8月21日
大会概要	ブロック予選を勝ち抜いてきた48校（男子24校、女子24校）による優勝決定戦。 男子は異例の4校同率優勝、女子は四日市メリノール学院の優勝で幕を閉じた。		

2. 担当試合 ※（試合内容は簡潔に書いてください）

日程	令和3年8月19日	会場	ALSOK ぐんまアリーナ
審判クルー	CC：陳氏（兵庫） U1：萩原氏（群馬） U2：高田		
担当試合	四日市メリノール学院（東海1） vs. 仙台第一（東北2）		
試合内容	序盤は四日市メリノール学院が高さと走力で先行する。仙台第一もポストプレイを中心に食らいつくが、安定感のあるメリノールが勝利。		

日程	令和3年8月19日	会場	ALSOK ぐんまアリーナ
審判クルー	CC：石崎氏（群馬） U1：鈴木氏（茨城） U2：高田		
担当試合	奥田（北信越1） vs. 東月寒（北海道1）		
試合内容	両チーム1敗同士の譲れない一戦。奥田はインサイド、東月寒はアウトサイドを主体に対称的な攻撃を展開するが、3Qに奥田が一気に抜け出し勝利した。		

日程	令和3年8月19日	会場	高崎アリーナ
審判クルー	CC：加藤氏（本部） U1：下田氏（長崎） U2：高田		
担当試合	津軽（東北2） vs. 沼田（開催地）		
試合内容	津軽はオールコートマンツーマンからターンオーバーを誘発し大量得点。苦しい時間が続く沼田も高さを武器に応戦するが津軽が大差で勝利。		

3. 大会（研修会）を通して 《 学んだこと 感じたこと 県内審判に伝えたいこと 等 》

3.1 審判技術について（加藤暁生氏）

- ① 処置ミスゼロ
 - ・ トランジションでビジーでないオフィシャルが確認する
 - ・ セルフトーク
- ② トラベリング→0 歩目を適用しないケースについて
- ③ FUL, ショットの見極め
 - ・ つま先が見える位置を確保
 - ・ 1線のディフェンスの距離に注目
 - (A) 遠いなら → オフェンスはシュートを選択しやすい → つま先確認の準備
 - (B) 近いなら → オフェンスはドライブを選択しやすい → レフェリーディフェンス
 - ・ ファウルがボールリリース前か後かを見極める
- ④ インテグリティ, RFG
 - ・ TF は人格否定ではない

PGCでは、特別なシチュエーション（コフィンコーナーでのトラップ、エッジ下で起きるプレイ、プレスディフェンスへの対応、OOBの協力、EOG・EOQなど）について重点的に話をした。全国大会でメカ崩れやミスが起きる原因として大きいのは、県内での取り組みや教わってきた人が違うことによるわずかな認識のズレである。このシチュエーションでは、この約束事でいきます。という擦り合わせが大切である。また、コミュニケーションの部分では、普段からファウルを宣したときに、ファウルをした人とされた人をセルフトークする癖をつけておけばミスは減らすことができ、確実な情報共有ができることを学んだ。

3.2 大会を通して感じたこと

1日目の初戦（四日市メリノール学院 vs. 仙台第一）、トスアップ後最初のポゼッションで、私のプライマリで起きたファウルを判定できなかった。私自身のポジションは悪くなく、アングルも取れていた。「あ、ファウルだ」と思ったにも関わらず、コールすることを躊躇してしまった。その直後にセカンダリがこれをコールした。例えばこのように、普段できていると思っていたことができない。自分に足りなかったのは、**全国大会に臨む覚悟とブレない強さ、その根拠となるものだった。**

最終日の割り当てをいただくことができず悔しかったが、「力を発揮できなかった」のではなく、「この舞台で発揮できる本当の力は身につけていなかった」が正解だと思う。これを私自身の現状と受け止め、次回のチャンスを掴むために精進したい。

眞榮喜氏のレフェリングを最後に見て、「見られているという意識」について学んだ。基本的な動作ひとつひとつが格好良く、全身の神経が研ぎ澄まされているような印象を強く受けた。プレゼンテーションとは、**格好つけるのではなく、すべての動きに意味を持たせること、それがすなわち格好よくみられることなのだ**と学んだ。

3.3 開催県のゲームを担当して

開催県チームは敗退となってしまったのだが、そこに送られた惜しめない拍手に、このコートに立たせていただいたことへの感謝とともに、この感動の裏にたくさんの方の思いや苦労があったのだと感じた。私たち審判員の準備や覚悟が、それに劣ることがあってはならないと強く感じた。

大会期間中、地元群馬県の審判員の方々、運営の方々から多大なるサポートをいただいた。また、初日2試合は群馬県の方とクルーを組んだが、ゲーム以外にもお仕事を抱えられているなかたくさんのお気遣いをいただいた。来年、再来年は、私たちがこれを全国の皆様に感じていただけるような大会を作り上げていかなければならないと感じた。

4. その他

この度は、群馬全中に派遣いただきまして誠にありがとうございました。仲地審判長をはじめ、日ごろお世話いただいております上級審判員の皆様に深く感謝申し上げます。

香川インターハイまで1年をきり、今後本格化する準備に、コート内外で誠心誠意取り組んでまいります。未熟なところもたくさんありますが、審判技術、人間性ともにインターハイという大きな舞台にふさわしい人間になりたいと思います。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。